

### <書評と紹介> 車田忠継著 『昭和戦前期の選挙システム：千葉県第一区と川島正次郎』

官田, 光史 / KANDA, Akifumi

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Journal of Ohara Institute for Social Research / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

743・744

(開始ページ / Start Page)

77

(終了ページ / End Page)

80

(発行年 / Year)

2020-10-01

車田忠継著

## 『昭和戦前期の選挙システム

——千葉県第一区と

川島正次郎』

評者：官田 光史



本書では、昭和戦前期の選挙のあり方が「選挙システム」という分析枠組みによって千葉県第一区選出の川島正次郎を例として分析される。章立ては次のとおりである。

序章 目的と分析枠組

第1章 代議士への道——一九二四年の二つの選挙

第2章 「二大選挙」——代議士川島正次郎の誕生

第3章 政党政治期

第4章 代議士個人後援会の誕生

第5章 選挙粛正期

第6章 翼賛選挙の時代

補論 戦後政治史への道——公職追放期の川島と選挙

終章 成果と課題

序章では、本書の問いが示される。代議士（候補者）は、有権者数が約4倍となった男子普通選挙（普選）にどのように向き合い、適応しようとしたのか、どのように代議士であり続けようとしたのか。さらに本書の分析枠組みとして、「選挙システム」も打ち出される。この枠組みは、デヴィッド・イーストン著（岡村忠

夫訳）『政治分析の基礎』（みすず書房、1968年）でいうところの政治システム（政治体系）に着想を得て、候補者による活動を循環（県会議員との関係の構築、政治活動、立候補、選挙運動、結果の把握、そしてその連続）として捉えるものである。

では、なぜ川島正次郎（1890～1970年）なのか。第16回総選挙（第1回普選）から第21回総選挙（戦前最後）まで連続当選したのは64人。そのうち戦後も衆議院議員か参議院議員に当選したのは26人。さらにそのうち自民党の派閥の領袖は4人（東京府第2区の鳩山一郎、千葉県第1区の川島、富山県第2区の松村謙三、熊本県第1区の大塚唯男。選挙区は中選挙区制による）。このなかで川島は唯一、出身地を選挙区としていない。したがって、川島の選挙システムは、その本質を最も鋭く示すのではないかと、このように著者の見立てである。なお、川島は東京市日本橋区生まれ、専修大学卒業。内務省勤務、アメリカ留学の後、東京日日新聞記者、東京市商工課長などを経て、多摩川水力電気株式会社の常務に就任していた。本書の分析対象外ではあるが、戦後は行政管理庁長官、自由民主党幹事長、専修大学総長などを歴任している。

もちろん、これまでも昭和期の選挙については、手塚雄太氏による加藤鎌五郎の研究など、優れた研究が積み上げられてきた。そのうち、「集団投票」論（浅野和生氏ら）、「ナショナル・スウィング」論（川人貞史氏）、「無節操」な投票行動論（山室建徳氏）に対して、著者は普遍化の材料を提供するという。また、地域では政党よりも個人の比重が増すという季武嘉也氏の指摘を踏まえて、政党の地盤を所与の前提とする選挙過程分析には検討の余地があるとも考える。さらに個人の力という意味では、後援会研究、とくに川島の後援会だけでなく、本多貞次

郎らライバル候補者の後援会も含めた比較・検討が必要になってくるとも訴える。こうして本書は、1924年の第15回総選挙から1942年の第21回総選挙に至るまでの川島の選挙システムを主題に設定する。

第1章では1924年の2つの選挙が取り上げられる。同年1月の県会議員選挙と5月の第15回総選挙である。第15回総選挙は小選挙区制のもとで実施された。まず確認されるのは、川島の地盤である東葛飾郡の社会経済的特徴である。東葛飾郡は、東京府と千葉市の狭間であり、多様な産業構造、経済的な地域格差をもつ。1920年代から40年代にかけては、都市的要素と農村的要素が混在した地域であった。

そのうえで、この県会議員選挙と総選挙から次の点が指摘される。①両者の運動性が高かったこと、②川島が千葉県第3区の護憲三派候補に決定するにあたっては、憲政会系県会議員クラスの人物が主導権を握り、地域の推薦会を続けていたこと、③この選挙区では中央の政友本党対護憲三派と異なり、政友本党（本多）対憲政会（川島）という構図であったこと、④川島は落選したものの、行徳町・浦安町・中山町などを地盤化し、地域有力者、母校の専修大学で築いた人的ネットワーク、青年団、労働組合、市場関係団体などを支持基盤化したことなどである。

第2章でも2つの選挙が取り上げられる。1928年の県会議員選挙と同年の第16回総選挙である。どちらも普選導入後の選挙であった。第16回総選挙から中選挙区制が採り入れられ、千葉県第3区は第1区（定数4）となった。この間の1927年6月、憲政会と政友本党が合同して民政党を結成した。このままでは本多と同じ政党に所属することになってしまうため、川島は政友会に入党したという。そして迎えた第

16回総選挙で、川島は初当選を果たす。

この県会議員選挙と総選挙からは次の点が指摘される。①前回と異なり、推薦会は開かれておらず、政党支部は候補者の選定や調整までは担っていなかったこと、②演説会が重視されていたこと、③「日本中の一人も食ふに困るものがない様にする」という川島の政治信条は、無産政党候補者のいない選挙区では好意的に受け止められたであろうこと、④地方議員が集票回路として機能していたことなどである。総選挙の後半戦、千葉県知事の紹介で県会議長の川口為之助と出会い、「水魚の交わり」となったことも今後の展開上、重要なターニングポイントとして言及されている。

第3章は政党政治期として、1930年の第17回総選挙、1932年の県会議員選挙、第18回総選挙が扱われる。川島は第17回総選挙で再選、第18回総選挙で三選を果たした。ここでは、次の点が確認される。①有権者に対する責任を果たすため、川島が議会活動報告演説会を継続的に開催していたこと、②県会議員選挙で得た基礎票の積み増し、川口の存在、地盤を越えた集票力の強化によって川島が連続3回当選の実績を手にしたこと、③当該期においても、地盤協定の効果の弱さなどに示されるように、県支部の影響力は小さかったことなどである。

第4章では、選挙自体から代議士個人後援会へと焦点が移される。ここでの分析から、①戦前期の後援会は普選に誘発される形で確実に増加していったこと、②千葉県第1区のライバルたちと異なり、川島が地盤ではない君津郡や千葉郡にも後援会を組織していたこと、③川島後援会が違法性のリスクを抱えながらも饗応や解禁前の選挙運動など「見えない」選挙運動に従事していたことなどが指摘される。

第5章は選挙粛正期として、1936年の県会議員選挙と第19回総選挙、1937年の第20回

総選挙が扱われる。川島は第19回総選挙で四選、第20回総選挙で五選を果たした。政党内閣の崩壊後においては、選挙粛正運動が始まり、買収などの腐敗の一掃が試みられた。ここでは、次の点が確認される。①政党政治期と同様に立候補や選挙運動は候補者主体で展開し、政党の影響力は限定されていたこと、②同じく、依然として地方議員は買収を繰り返し、候補者の集票回路として機能していたこと、③川島の支持基盤が動揺していたのか、第20回総選挙で市場団体関係の公的な支持が確認できなくなるなどである。

第6章では、1940年の県会議員選挙と1942年の第21回総選挙（翼賛選挙）が取り上げられる。翼賛選挙において、川島は翼賛政治体制協議会の推薦から漏れたものの六選を果たした。これらの選挙からは次の点が指摘される。①1940年の県会議員選挙では政党支部が陣頭で指揮したが、代議士によって擁立された候補者をそのまま公認していたこと、②翼賛政治体制協議会による推薦候補の決定は、候補者自身の人間関係に左右されており、推薦候補と非推薦候補の分水嶺は曖昧であったこと、③川島の支持基盤が3つ、具体的には、個人型集票回路としての地域有力者（川口為之助）、組織型集票回路としての漁業団体関係（君津郡水産会）、地域としての行徳町（養父・才次郎の出身地）に収斂していったことなどである。

補論では、戦後政治史への展望として、公職追放期の川島による選挙が扱われる。ここでの分析から、①川島が総選挙で身代わり候補の当選を演出していたこと、②総選挙の身代わり候補は、1946年の第22回総選挙で当選しながらも社会党に接近した藤田栄のように、川島からの自立を目指したこと、③千葉県知事での川口の当選など、地方選挙でも候補の当選を演出していたことなどが指摘される。

終章では、本書の問いに対して「政治活動と選挙活動の連動・一致、個人型および組織型集票回路を通じた票の回収力、地盤町村の存在、この三つの確立と循環こそ、有権者の激増と中選挙区制度という二つの新たな政治環境の中、普選に向き合い、適応しようとした川島の回答に他ならず、本書でいう選挙システムに該当する」という答えが与えられる（323頁）。さらに川島の支持基盤として、「個人型集票回路」と「組織型集票回路」という2つの回路のあり方が整理される。川口によって代表される「個人型集票回路」は、川島の連続6回当選の原動力であった。一方で、「組織型集票回路」は、選挙ごとに変化しており、前半は専修大学関係が目立ち、後半は漁業関係を中心とする市場関係団体の支持が厚くなる。後援会は一時期しか支持基盤として確認できないとされる。

評者は本書を通読して、ジェラルド・カーチス著（山岡清二訳）『代議士の誕生』（サイマル出版会、1971年）を初めて読んだときのような感動を覚えた。それは、選挙をめぐる人間模様が活写されているところに本書と『代議士の誕生』の共通点があるからである。もちろん、著者はカーティス氏のように候補者宅に居候して選挙を観察したわけではない。しかし、史料を博捜することでフィールドワークに匹敵するディテールが本書に付与されたことは間違いないだろう。

著者は、2012年から『日本歴史』誌上で連載中の「近現代史の人物史料情報」に「川島正次郎」の項目を執筆している。この項目からは、川島に関する史料なら何でも調査し、収集する意気込みが伝わってくる。そのなかで高い関心が示されているのが、日記の有無である。著者は川島の縁者に会うたびに日記の存在を尋ね、川島が日記をつけていなかったことを確認

している（車田忠継「近現代史の人物史料情報 川島正次郎」『日本歴史』第787号、2013年）。この事実の確認は、著者としては残念なことだったはずである。しかし、その確認があったからこそ、著者は地方紙にとどまらず、川島にゆかりのある地域の図書館、博物館、資料館で所蔵されている史料の探索に向かっていった。その地道な作業の結晶が本書（あるいは本書のもととなった論文）なのである。

こうして獲得されたディテールは、本書が主題とする選挙システムの循環に彩りを与えている。なかでも印象深かったのが、初陣となった第15回総選挙の描写である。その終盤戦では、川島のポスターが全部剥ぎ取られたり、川島の運動員と本多の運動員が道路で喧嘩となってドブに落ちたり、焦った川島が本多に対する「人心攻撃」を行って逆に選挙民の反感を招いてしまっていた。開票後には、川島の支持者が落選に納得せず開票所に投石したり、本多陣営の自動車が行徳町に入ったところ、彼らは道路に釘を撒いてタイヤをパンクさせ、やはり喧嘩となったという。このようなディテールへの探求心は、著者も高く評価する杉本仁氏が進めてきた民俗学的見地からの選挙研究にも影響を受けているようである。また、ライバルの本多が1937年に病死した記述も感慨深かった。本多は床次竹二郎に従ったために、政友会、政友本党、民政党、政友会と政党遍歴を辿っていた。

このような豊かなディテールの隙間にいくつか気になる点もあった。まず川島の選び方である。著者は選挙システムの視点から戦前期の普選を分析するため、対象者を限定していく。その第一の基準は、連続当選である。もちろん、選挙なのだから一般的な目標は当選のはずだが、選挙システムという動的な分析枠組みは、

落選からの当選に（もちろんその逆にも）十分対応すると思われる。これに関連して、著者は分析を経て東葛飾郡に「ナショナル・スウィング」論などが当てはまらないことを指摘しているが、連続当選を基準とすることは、「ナショナル・スウィング」論などが適用されにくい事例をあらかじめ選んでいることになるのではないだろうか。あるいは、著者は普選下の総選挙の全当選者のなかに川島を位置づけることで、他の研究との対話を試みようとしているのかもしれない。しかし、はじめから川島が消去法的に選び出されたわけではないだろう。川島に内在する魅力から主題を設定するという方法もありえたのではないだろうか。

加えて、細かいことではあるが、政党支部に対する代議士の影響力の強さが繰り返し強調されている。支部長が川島も含む代議士であったことを考慮すると、支部か代議士かは決定的に重要な問題なのだろうか。また、川島の支持基盤のうち「個人型集票回路」が川口らによって代表されている。川口も県会の実力者であったことを加味すると、彼の人脈はそれなりに組織化されていたのではないだろうか。

著者は本書の分析枠組みや成果を普遍化し、先行研究や将来の研究に接続することに心を砕いているように見受けられる。そうした姿勢には敬意を表したいが、そもそも選挙区の個別・具体的な研究は普遍化に馴染むのかという素朴な疑問も湧いてくる。そのような感想さえ抱かせるだけのディテールに満ち溢れていることこそが、本書の魅力であるように思われる。

（車田忠継著『昭和戦前期の選挙システム——千葉県第一区と川島正次郎』日本経済評論社、2019年9月、vi + 360頁、定価6,400円 + 税）

（かんだ・あきふみ 関西大学文学部准教授）